一般質問原稿

藤井学昭

「同朋会運動」15 周年で「古い宗門体質の克服」と頷き、門主を中心にした差別構造で成り立つ教団が、自らを批判し教団問題が惹起するなか制定された大谷派宗憲でした。「門主」が「門首」となりあらゆる人々が水平の関係で教えを聞く教団として歩み始めたが、果たして現在はどうなっているのか。

昨年来、総長・財務長演説にあって同朋会運動の言質が見当たらないことをどう受け止めたらいいか、同朋会運動は終わりだと言われているようであります。総長演説で、「同朋社会の顕現に務めることを使命としてきたことこそが、わが宗門のいのち」と語りながら、「宗務改革の推進に向けて内局案」では、「『同朋社会』に包含される世界観は、もはや共通認識を持ち得ない」と宗務改革を提起する必要性が語られます。ダブルスタンダードとして語られる「同朋社会の顕現」。同朋会運動と両輪をなす大谷派宗憲がこんなにも愚弄されていいのですか。まさに同朋会運動や宗憲改正は失敗だったのか、「共通認識」を持ち得ていないというなら、その問題はどこにあるのか問わず、「同朋社会」の理念が空文化していると受け止めているなら、何故課題の共有が出来ず、「我が宗門のいのち」などと恥ずかしくもなく演説で語るのか。総長から同朋会運動 60 周年、宗憲改正 40 周年にあたる総括を改めていただきたい。

ポストコロナでは、池田勇諦氏から「根源的連帯に回帰する真実の生き方とは、現実と切り結んでいく歩み」と提示された。「内局案」ではどういうわけか「現実と切り結んでいく歩み」という語が常に抜けているが、ポストコロナの同朋会運動再生へのヒントは、確かにそこにあるのではないかと思う。「現実と切り結ぶ」とは、確かにいままで会館にて全国の門徒さんとひざを突き合わせ様々な声とともに、靖国や部落差別、ハンセン病、死刑、原発、農業、子供や中学生等、それこそ目の前の現実の諸問題を宗教的課題として学び直す場でありました。その歩みに現在の課題を見出したとき、私の東京教区だけでなく全国規模でも、推進員創出への熱意の低下やお寺単位の同朋会館奉仕団上山減少等に同朋会運動衰退が明瞭に表れていないか。課題別の奉仕団や大谷派以外の方々にも開放し、社会に開かれた「現実と切り結び歩む」最先端の場として、同朋会館の再生(活性化)と展望が開かれるのではないか。お考えをお聞きしたい。

しかし、新しく施策として展開される寺院活性化支援事業は、どうも一ケ寺の生き残りを求めて、一人の念仏者を生み出す施策ではないように感じるのです。同朋会運動の変質と考えられ教化事業ではなく、寺院の基盤整備事業ではないでしょうか、この事業の位置づけをご説明ください。

教団の願いや教えの方向性が明瞭になって、初めて行財政改革のすべきことが始まるのでしょう。教えの言葉が伝わらず熱意を感じず方向が定まらない。教えを語らず伝わらず、不動産と運用で成り立つ教団でどうするのか。過去ウィルコム事件で運用益の失敗を受け

保管と決めたはずが、特定目的のための資金まで一括にされ運用されるという財政調整基金(仮称)が提出されました。そのお金を運用するのですか、宗派との親和性がある運用先とは情けない。どのようなものを指すのか。

その一つに SDGs 関連事業への運用というが、それより先にこの教団が SDGs の目指す社会へ参画することではありませんか。『同朋社会の顕現』差別事件では、「学べば学ぶほど差別的になるのはなぜなのか」（小森龍邦）と問われた私たちです。SDGs17 の目標から教団を見たとき、はたしてどのような姿が現れるか、ご所見を伺いたい。

自分を大切にすること
他人を大切にすることが
同朋会運動です
（松本　良平）

この言葉は、長年にわたり同朋会館で補導・教導職を務められてきた先輩が語られました。入館者が語る目の前の課題と教えがどこで切り結ぶのかと悩みながら、丁寧に大切に積み上げてきた言葉でしょう。同朋会運動 60 年の総括にすらなりうる、とても大切な言葉として、私は受け止めました。